

「オータム吉日」——井伏鱒二と流謫の言語

野崎 敏

1

「亡命は現代日本の作家にとっては、現実的なものとして考えることのできない抽象的概念に過ぎないが、現代文学全体の状況を見渡した時、より緊迫した意味を持つ現実として浮かび上がってくる」

沼野充義はかつて、亡命文学論のマニフェストともいべき論文「流謫の言語——亡命文学の栄光と悲惨」（『講座 20 世紀の芸術』第 5 巻「言語の冒険」岩波書店、1988 年所収、のち沼野充義『徹夜の塊 亡命文学論』作品社、2002 年に再録。引用は同書、13 頁）にそう記した。続けて沼野は「現代文学の傑出した部分を代表するジョイス、ナボコフ、ゴンプロヴィッチ、ソルジェニーツィンといった存在がみな『亡命者』であるという事実は、——もっとも、その言葉の意味するものが一人一人の作家によって大きく異なるのは不可避だとしても——単なる偶然としては片づけられないだろう」と述べている。

なるほど、そこに挙げられた作家たちに比肩しうる、実人生レベルでの越境や、異言語間の横断を糧として巨大な文学世界を創出した作家は、なかなか日本文学においては見出しにくいだろう。

しかし同時に、沼野が強調するような、亡命作家たちがその「周縁の人」としての立場ゆえに示しうる「あらたな言語的可能性」（『亡命文学論』29 頁）に関しては、自らが亡命者となったのではなくとも、日本の作家たちのうちにもそうした可能性に惹かれ、それを意識的に探求した者がいたのではないだろうか。とすれば、日本の非亡命作家を対象としてもなお、亡命文学論は成り立ちうるかもしれない。井伏鱒二の作品を例にとって考えてみよう。

2

最初に指摘できるのは、井伏作品には亡命者や越境者が数多く登場するという事実だ。とりわけ目立つのはロシア人たちの姿である。

もちろん、「ジョセフと女子大学生」（1930 年）のジョセフのように、アイルランドから逃れてきた青年もいる。「水辺釣魚の記」では「スコットランドの山奥に生れた」（『井伏鱒二全集』筑摩書房、第 4 巻、1998 年、420 頁。以後、井伏作品の引用は同全集により、初出時には巻数と頁数、以降は頁数のみ示す。引用は新かな遣いに改める）年配の外国人が鮒釣りをする釣人に突然、日本語で話しかけてきたりする。「隣邦人について」（1938 年）など、中国からやってきた人びとを登場させた短編もある。しかし何とって

も異彩を放つのがロシア人たちを描く作品群であることは、涌田佑編『井伏鱒二事典』（明治書院、2000年）に「ロシアもの」の一項目がたてられていることがよく示しているだろう。

その項目に涌田はこう書いている。「井伏作品の中には当初からロシアものが目立つ。その理由は幾つかある。チェホフ、ドストエフスキー、プーシキンなどのロシア文学が時代的に迎えられていたこと、ロシア文学の権威片上伸が早大教授の中にいたこと、聚芳閣〔井伏が一時勤めていた出版社〕時代の井伏担当書の中にガローニンの『日本幽囚実記』のあったこと、早稲田級友の中に北海道出身で後に北方郷土研究家となった深瀬春一のいたこと、それらに漂流ものを含めての井伏の興味が重なったこと等があげられる。」（372-373頁）

要点はそのとおりだが、ひとつだけ付け加えるとすれば、井伏とロシア人との出会いが非常に早かったという事実がある。「松山におけるイワン」（1938年）によれば子どものころ、夏休みに祖父に連れられて四国見物の旅行をした折、井伏は「松山市の宿屋で急に腹痛を催して」（第7巻281頁）病院にいき、赤痢の疑いがあると診断されてそのまま入院した。すると井伏の寝かされた寝台の隣には「わけのわからないことを云う外国人の子供」が寝かされていた。やがて両名とも赤痢に罹患していることが判明し、入院生活は長引く。「いつの間にか二人は仲よくなった」。

茶色の頭髮の長く伸びたそのロシアの男児と自分が親しくなった経緯を井伏はこう分析する。「ロシアの子は私がロシア語を知らないので、優越感をもって私に愛情を見せていたものらしい。私はロシア人の子が日本語をよく知らないので、あわれなものとして彼に好意を寄せていた。彼の名はイワンといい、大人になったらイワン・キリシャノウイチ・ストロマノという妙な名前に改めることになっているそうであった。」（282頁）

異国の男児との出会いはそのまま、知らない言葉との出会いであり、異言語との接触によって双方の感情が刺激される。優越感にせよあわれみにせよ、いずれもがまず相手の口から発せられる不思議な音に引き寄せられて、外国語のなかへ一歩踏み込んでいこうという気持ちを生じさせているのだ。そうやって幼い井伏は、イワンのいう「ボタ、オホータ」が「水を飲みたい」であり、「マチュシュカ」といって啜り泣くのは「おかあさん」を恋しがってのことであり、「エトチョウ」は「これは何じゃ」、「トート、トート」は「そうじゃ、そうじゃ」の意味であると知る。ただし男児二人の異言語習得のスピードにはやや差があった。「私がおすこしながく入院していたら、ロシア語で片ことくらい話せるようになったかもわからない」。それに比べて「私の入院中イワンの日本語はめきめきと上達し、私が退院するころには彼は片ことくらい話せるようになっていた」（283頁）のである。

その差異はひよっとすると、「私」が祖父に庇護され、母語話者に囲まれているのに対し、イワンは異国にあって身内もなく、自分ひとりの力で周囲に溶けこんでいかなければならなかったことに由来するのかもしれない。「彼はその前々年の明治三十七年に芝罘附

近の戦いに敗れたロシア兵とともに、日本人の捕虜となって松山に護送されて来たものである。芝罘で彼の両親は行方不明になり、それでロシア軍の野戦病院に引取られていたところ、退却に際し逃げおくれで捉まったそうである。」(28頁) 芝罘(しふう)は中国山東省煙台市の港湾地区で、渤海湾を隔てて旅順と向かいあっている。20世紀に入ってドイツ、ロシアに支配され、明治37年には日露戦争の影響を被った。「天涯の孤客ともいうべき」イワンの境遇は、戦争の結果としてもたらされたものだった。本人がまだ自分の身の上について理解していないだけにいっそう、イワンは戦争の世紀が生み出した流謫の運命を純粹なかたちで示しているように思われる。もちろん当時、井伏もまたそうした歴史的背景を意識するにはあまりに幼かった。しかし「松山のイワン」冒頭はこう始まっている。「誰でも子供のときに覚えたことは容易に忘れない」(280頁)。井伏の記憶にはロシア語のかたことが残されたのみではない。「イワンを独りぼっち寝台に置き去りにして」(291頁) 一歩先に退院したという事実も、忘れえぬこととしてはっきりと刻まれたのである。

その思い出を蘇らせるような機会が、学生となって東京に出てきてのち井伏に訪れた。早稲田大学の二年次、クラスの聴講生にロシア人青年がいたのである。「聴講生ブーニンのこと」(1934年)には、その学生とのやりとりがユーモラスに描き出されている。日本の古典文学や近代文学の研究をこころざしているくせにまだ日本語が少しもできないブーニンは「帝政ロシアの旧貴族の子弟であった」(第5巻58頁)。文学部での講義において、「ロシアから帰朝した」ばかりの「片岡先生」はブーニンに対し、ロシア語ではなくフランス語で質問する。それはフランス語会話が「ロシアの貴族たちの骨身にまでしみこんだ悪い好み」(57頁)であることを先生がよく知っていたためだったらしい(先生のモデルは明らかに片上伸)。学生たちは先生のフランス語力に一驚しつつも、授業の終わりを告げるベルが鳴ったので気もそぞろになる。「質問応答、終了！」などと呟く者もいた。それを聞きつけた先生はすっかり気を悪くし、「私」と仲間は陰口の濡れ衣を着せられて教室で立たされる。そうしておいて先生は、「若い身それで孤独に置かれた亡命客の身の上について、関心を持たぬ人間は感動する精神を持ちあわしていないと断定されても止むを得ないでしょう」と一同に「訓戒」を授けたのである。「おそらく諸君は、苦もなく崩壊して行った旧ロシアを知っているだろう。そして幾百万の流浪者があったことを知っているだろう。それは歴史的な出来ごとであった」(60頁)云々。

先生に不当な扱いを受けながらも、「天涯の孤客ブーニン君」に対する先生の「満腔の同情」を引きつぐかのように、「私」はブーニンとともに次の講義に出席(遅刻)したり、校庭のベンチに座ってフランス語会話を交わしたりする。ブーニンが一日しか登校しなかったため交遊は淡いものに終わった。しかしその十数年後の再会というエピソードによって、井伏は早稲田時代の懐旧譚に小説味を加える。ブーニンは日本人女性に養ってもらっているらしく「正確な日本語」(65頁)を話すようになっていた。同時にその顔は「どことなく薄汚くなって」もいた。それは「故国に帰れるかもしれないという期待が裏

切られて行く」(66頁) 境涯の切なさをにじませるとともに、ロシア貴族だったブーニンがしががない一介の「日本人」に変貌しつつあることを示すディテールでもある。

このように、日露戦争の捕虜に続き、革命を逃れてきた白系ロシア人たちの姿が井伏作品には初期のうちから描きこまれている。ブーニンのかたわらで、ロシア人の女性たちも存在感を放つ。「埋憂記」(1927年)では、主人公の「私」は隣の家の二階に下宿するロシア人少女ナターリアとの交流に心和むものを覚える。「もとのようなロシアになってから帰るわよ」(第1巻135頁)というナターリアは、そのときに「もう五十年しなければ」(137頁)訪れないとも感じている。「夜ふけの客人」(1931年)では「私」が引越していった家の隣に「ソフィヤ・パウロウナ」という名の女性が住んでいた。「奇蹟」(1931年)の「私」は地下室酒場の「ニーナ」という名の「ロシア女の女給」に「たいへんうちこんでしまって」(第3巻198頁)おり、足しげく通っては「ロシア語で」「恰も恋人同志のごとく」語りあっている(ここでロシア語が「夢の言語」として用いられていることについては、拙著『水の匂いがするようだ——井伏鱒二のほうへ』集英社、2018年、第3章で分析した)。

いずれもごく短い作品であり、そこで物語に十分な展開が与えられているとはいいいにくい。しかし共通するモチーフが反復されているだけに、井伏にとってのこの主題の大切さが伝わってくる。イワンにせよブーニンにせよ女性たちにせよ、ほとんど孤立無援の状態では何とか一日一日を暮らしながら、異国の言葉を呼吸し、あやつるすべを身につけていくしかない。そうやって彼らは、いわば徐々に日本人化していくことを余儀なくされる。逆に井伏にとって、彼らとの接触は英語やフランス語やロシア語を試しに用いる機会となり、異国にあるかのような興味を、ごくささやかなかたちではあれ味わうことができる。言語を複数化すること、互いに異質な言葉が響きあう場所に身を置くことへの井伏の執着がうかがえる。

しかも重要なのは、亡命者としてのロシア人へのまなざしが、井伏においては同時に、日本から漂流し亡命していった者たちへの注目と共存していたことである。「夜ふけの客人」でロシア人女性ソフィヤを登場させた翌年、「日本漂民」(1932年)で彼は「私の計画している史実小説のノート」(第3巻495頁)として、「日本の難破船や漂流民たちを取扱う」企図の一端を明らかにしている。井伏が構想するのは「カムチャトカ、千島列島、ヤクーツク、バイカル湖などの地点を舞台」とする小説であり、「フォストフやダウイドフが択捉島や樺太を荒掠」した事件や「シベリア流刑犯人ハンベンゴロウ」が日本近海を經由してマカオまで落ち延びた事件などを扱う予定があるという。「日本漂民」ではとりあえず、江戸時代に漂流してロシア船に助けられ、オホーツク、ペテルブルクを經由したのち長崎に送り返された「奥州石の巻港の船頭平兵衛」の物語が素描されていた。また、「ペートル大帝」がペテルブルクに創立した日本語学校や、その後イルクーツクに作られた日本語学校など、日本語が国境を越えていく事例への関心も示されている。

以降、日本から出ていった者たちをめぐる主題は、日本にやってきた亡命者というテー

マ以上に長きにわたり、井伏文学をつらぬく流れとして保たれ続けた。『ジョン万次郎漂流記』（1937年）や『漂民宇三郎』（1954年）はそこから生まれた大きな成果である。とりわけ宇三郎のたどる運命は象徴的だ。宇三郎と仲間たちは松前から江戸に向かう途中で漂流し、ハワイ・オアフ島からカムチャッカ、オホーツク、シトカ、エトロフを転々とする。そして4年ののちようやく松前城下に戻るのだが、宇三郎だけは日本に入国しない決意を固めて仲間から離脱する。アラスカのバラノフ島からパナマを経て、最後はまたオアフ島に戻り、そこで一生を終えるのである。

海外渡航が「国禁」（第17巻257頁）とされた時代の状況を背景に、井伏は地球上の南北をへめぐるような壮大なスケールの越境を強いられた者の姿を共感深く描き出す。自由の喜びと流離の悲しみが共存する宇三郎の冒険は、「帰国して目出度し目出度しの者の側に都合のいいように記録」（259頁）が残されているなか、どこにもその顛末が残されていないと語り手はいう。「除者^{のけもの}にされていた宇三郎はすっかり抹殺されている」。現実には、井伏の参照した江戸時代の文献（『時規物語』および『蕃談』）にはそもそも宇三郎が登場しない。作家の想像による架空の人物なのである。それだけにいっそう、井伏が亡命者の「抹殺」にあらがう企図として小説を構想していた事実が浮き彫りになるのだ。

3

日本人が亡命し、ロシア人に変身する——漂流ものをとおして1930年代以来、幾たびか描き出してきた主題を井伏が改めて、大掛かりに捉えなおそうとした作品が、1957年に「別冊文藝春秋」で連載が開始された「十二本の山毛櫨^{ふな}」だった。

残念ながらこの作品は、1960年まで足かけ4年にわたり連載を続けながら、結局その「前編」が終了したところで連載は中断し、続きは発表されずじまいになってしまった。しかしそこまでの部分だけでも興味津々のディテールに満ちている。冒頭部分は以下の通りだ。

その場所も、ちょっと気恥ずかしいほど遠いところの話である。ハバロフスクの西方、ウラヂミロフカの町から数露里東南方のBという一部落で、かつて日露戦争の末期に、日本兵の捕虜十三人のうち十二人が銃殺されたのであった。たった一人、非戦闘員であった今野森之助というものだけが命を助けられた。この者は亡き十二人の靈魂を弔う意味で、丘の麓に十二本の山毛櫨の苗を植えた。鉄火箸ほどの幹の苗木であった。

当時の日本の軍律では、敵の捕虜になったものは、戦が終わってからも生還することを許されなかったと云われている。無理に故国に帰れば銃殺の刑に処せられる規則になっていたそうだ。今野森之助は危機を感じたので、シベリヤに土着することにしてB部落にそのまま居残った。この者はロシア語も出来、従軍中は衛生兵の手伝いなどして療治の真似ごとにも出来たので、部落の韃靼人や出稼ぎの苦力たちから重宝がられるようになった。（第19巻339頁）

こうしてまず告げられるのは、物語の舞台が「ちょっと気恥ずかしいほど」の遠方であるということだが、その形容は井伏らしい含羞あるいは自己への皮肉に留まらず、これが日本という国家の枠をはみ出す発想とひそかな抵抗を秘めた作品であることを暗示しているだろう。見慣れたBではなくBの文字がすでにして、ロシア語をめぐる冒険物語を予告する。実際、作中にはカタカナ表記によるロシア語が頻出する。そればかりか銃殺刑を恐れて帰国を断念した今野森之助は、じつはかつて神戸在住だった少年時、縁あって「パルウィッチという異人」(342頁)の書生となり、ロシア語学習に身を入れ、「イワン・モリノウィッチ」(345頁)なるロシア名を与えられていた。以下、日露戦争間近の時代において日本人——ただし父は清国人、母は花柳界の女という生まれで「いじめられて」(341頁)育った——が、旅順にわたって徐々にロシア人化していくという驚くべきストーリーが、冒頭の場面からの長いフラッシュバック形式によって展開されていく。森之助＝モリノウィッチ(またの名をモリノスキー)は、旅順の日本人たちから「露探」(405頁)ではないかと嫌疑をかけられ、脅迫状を渡されて、もはや日本に戻っても自分の居場所はないと思いつめることになる。

ここでは、この忘れられた作品が提起するさまざまな問題のうち、一点にしぼって考察したい。小説中に登場するロシアの文学作品についてである。

明治三十七年二月、風雲急を告げる情勢のなか、旅順の「ロシヤ陸軍倶楽部」では一夜、将校たちを前に『桜の園』という芝居が上演される。「一九〇三年、すなわち去年チェーホフの書き上げたもので、今年の一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一月、十二月の劇場で上演されたそうである」(428頁)。森之助＝モリノウィッチはその上演を見物するチャンスに恵まれるのだ。

「山椒魚」の発想の源にチェーホフの短編「賭」があったと回想している(『山椒魚』について)第24巻45頁)ことが示すように、井伏は若年のころからチェーホフを愛読した。そもそも井伏の学生時代には、「なんとといってもロシア文学の流行が圧倒的」であった(『現代の作家』1952年、別巻1-80)。友人のなかには、ドストエフスキー『罪と罰』のラスコーリニコフが貧民窟に住むがゆえにわざわざ自分も貧民窟に引っ越したり(『引越やつれ』1948年)、トルストイの「隠遁説」にかぶれて伊豆大島で養鶏事業を企てたり(『半生記』1971年)する者もいた。井伏自身は、早稲田で出会った信頼する友・青木南八の忠告にしたがったという。「南八は私に、翻訳でドストエフスキーはいきなり読むと深刻癖になる。先ずチェーホフ、プーシキン、トルストイ、それからドストエフスキー」を読むよう勧めた(第25巻91頁)。「処女作まで」(1970年)では、別の友人による忠告とされているのだが、いずれにせよここに挙げられている名前が学生たちにとってロシア文学の代表だったのであり、そのなかでもドストエフスキー、トルストイの別格的な偉大さと、とりわけ前者の危険さが意識されていたのだろう。沼野充義は『チェーホフ 七分の絶望と三分の希望』(講談社、2016年)の「はじめに」で、ドストエフスキーとトルストイを「巨木」にたとえ、それに対しチェーホフは「次の世代が成長していくため

の土壌をつくったキノコみたいな存在だった」(5頁)としたうえで、「巨木」のほうが偉いとしても「どちらが好きかと聞かれたら、やっぱりキノコかなあ、と答えたい」と記している。井伏もまたそうした嗜好の持ち主だったことは間違いない。「十二本の山毛櫨」で主人公に『桜の園』を観劇させることで、井伏は自らの文学的源泉に浸り直し、チャーホフの活躍していた時代のロシアにタイムスリップする喜びを味わっているのだ。

しかも注目すべきは、そこで主人公が次のような感慨を抱くことである。劇中、脇役にすぎない「老僕フィルス」が「観客に深い感銘を与えた」(430頁)様子を見て、「森之助はしみじみと好個の老僕だと思った。ロシヤでは十九世紀から二十世紀にかけて社会的にいろんな人物を輩出したが、小説や芝居で見ると、あらゆるロシヤ人のうち森之助の一ばん好きなのは貴族のうちにいる老僕である。ツルゲーネフの小説でも、出て来る人間のうちで好きになれるのは従僕であった。先日、読みかけて止していたトルストイの『戦争と平和』にも、アンドレー老公爵のうちのチホンという老僕に限りない好感を持つことができた」。

そこまで、森之助が文学愛好者として描かれていたわけではないので、この述懐はやや唐突であり、作者その人の偏愛が吐露されたものだろうと思わずにはいられない。さらに続けて「十九世紀のロシヤで産出した一ばんいいものは従僕または老僕ではなかろうか」(431頁)とまで述べられている。

この言葉には興味を引かれずにいられない。なぜなら井伏文学においてもまた、従僕ないし老僕的な人物は際立った精彩を放ち、読者に「深い感銘」を与えずにはいないからだ。「十二本の山毛櫨」の記述に導かれて、われわれは井伏の作品を改めて、ロシア小説を「土壌」として育まれ成長したものとしてとらえなおすことができるのである。

4

「朽助のいる谷間」(1929年初出)は井伏の記念すべき第一作品集『夜明けと梅の花』(1930年)の巻頭を飾った短編であり、清新な文体によっても滋味深い内容によっても、作家初期を代表する一篇といえるだろう。しかもその魅力は、いわばロシア風味によるところが大きいのではないだろうか。

とにかくまず冒頭部分を読んでみよう。

谷本朽助(本年七十七歳)は実に頑固に私を鼠舐している。私がいかに遠い旅先へ行っている時でも、彼は毎年、秋になって口から吐く息が白い蒸気となって見える時節になると、私に、松茸やしめじを送ってくれる。うどん箱に苔を敷いて、濁びた茸類を一ぱい詰めこんで、箱の表には必ず「オータム吉日」と記してある慣わしである。

彼はそれ等の茸類の発生する山の番人である。その山は、すでに私の祖父の時代に他人へ売却したものであるにもかかわらず、彼は頑迷に昔からの習慣を守っているのである。(第1巻325頁)

こうした数行を読むだけで、井伏がその文学的出発にあたり、いかに文章自体のかたちを意識的だったかが理解できる。要するに地の文においては、いわゆる翻訳体が基調をなしている。「実に頑固に私を最眞にしている」といった文体の、西欧の言葉を直訳したような感じが、誇張したおかしみを印象づける。さらに単純化するというなら、井伏にとって小説の文章とは基本的に翻訳文であり、どこか人工的な外国語としての性格を失うことのないものだったのではないか。広島の前田舎に生まれ育つなかで、初めて耳にした標準語がいかに暴力的に響いたかを彼は繰り返し回想している（『鶏肋集』1936年、「半生記」1970年など）。だが上京以降、彼はその標準語を自ら当然のように話し、書くことに習熟しなければならなかった。井伏は一種の借り着をまとったぎこちなさを忘れることなく、むしろそこからずれや揺らぎを生じさせることによって新たな小説作法の可能性を開拓していったのである。その際、いかにも翻訳調の地の文に、土地の言葉遣いをふんだんに盛り込んだ会話文を対置するのが一つの実験的な意義をもつやり方となっていく。

「朽助のいる谷間」はその最初の目覚ましい例であり、「谷本朽助（本年七十七歳）」こそは明治以来の人工的な標準語に対し、なお存続する土地の生きた言葉の守り手なのである。

それにもかかわらず「オータム吉日」とはどういうことだろう。田舎で山の番人をしている老人が、わざわざ英語まじりの表現を使うのはなぜなのか。読者の好奇の念を巧みに誘いながら、語り手の「私」はすぐにその背景を説明してくれる。朽助は「ハワイの出稼ぎから帰って来た」人物であったというのである。さらにこんなふうにもいわれている。「彼の家は谷底の一軒屋で、おそらく彼はハワイで農業のことを学んでいなかったため、山番をするよりほかに能がなかったものであろう」（327頁）。

つまり、今では「私」の「田舎」（328頁）——井伏自身の故郷である福山と考えていい——の谷底で暮らしながら、朽助は若いころハワイに出かけ英語で暮らした経験のある人物だったのだ。それゆえ、「私」は「尋常一年生」（327頁）のころ、朽助を英語の「個人教師」として彼の家に通い、朽助は「頗る厳格」にその役割を演じた。

「私は彼のたった一人の教え子である。二十年前、リーダーの三の巻が終了した時、彼は教え子に対して次のように語ったのである。

「若しあんたが立身せなんだら、私らはいっそつらいですが。そんなめに逢うほどならば、私らはなんぼうにもつらいですが。」

私はそのとき激しく感動して、そして帰ろうと思って外に出ると、いつの間にか降りだしたのか雪が、谷底にも峰にも一ぱい降り積もっていた。（328頁）

朽助は自分が仕えた地主——とはいえ主従関係は「私の祖父の時代」ですでに終わったのだが——への忠誠を守り、その孫の出世をこいねがっていた。引用した箇所最後に谷間の光景を満たしている雪の白さは、冒頭に示された秋になって吐く息の白さと通いあい、ひたむきな善意と祈願の気圏を描き出している。朽助の純真はかつて小学生の「私」

を感動させたのと同じように、毎年心づくしの「凋びた茸類」を受け取る現在の「私」の心をも揺さぶり続けている。しかもその「私」は東京には出たものの、朽助が勝手に「推定」するように「歯科医」や「技師」になったわけでも「弁護士」になったわけでもない。「不遇な文学青年の暮し」を送るのみで事実上の無職、まさに「なんぼうにもつらい」身の上をかこっている。「吉日」などいっこうにめぐってくる気配のない彼に期待をかけ続ける朽助の想いは、いまや無償の情熱というべきものになっているのだ。

「オータム吉日」という不思議な表現には、そうしたさまざまな意味合いが凝縮されているわけだが、このカタカナと漢字の合体にはそれ自体、井伏の発明というべき面白さがある。中浜万次郎に「ジョン万次郎」なる呼称を与えたのは井伏だった。その発想にも通じるような、和洋折衷というか、異言語混交の可能性を秘めた表現なのである。しかも朽助の知るハワイとは、かつてジョン万次郎の流れ着いた土地であり、また宇三郎も漂着することになる土地だった。朽助は帰国ののち谷間に安住の地を得たはずが、谷間に巨大な「池」が作られることとなり、立ち退きを命じられている。その命令に従おうとしない朽助のために、「私」が故郷に帰って事態打開を図ろうとするが、結局は何の役にもたないというのが「朽助のいる谷間」のストーリーである。年老いた朽助は住み慣れた家を奪われ、暮らしの拠点を破壊される。役所は朽助に「新築家屋」(342頁)を用意しているとはいえ、それは朽助にとって「他人の家」にすぎない。すなわち、ここに描き出されているのは一個の流亡の人生なのだともいえる。「オータム吉日」とは朽助の辿った運命をアイロニカルに封じ込めた表現ともいえるだろう。そして定職を持たずデラシネ化しつつある「私」自身、潜在的に流亡の危機を抱えた人物なのである。のちの井伏作品に登場する亡命者たちや漂流民たちの境涯は、朽助や「私」にとって決して無縁なものではなかったのだ。

そのとき、先の引用でごく一例を見たような、井伏作品に盛りこまれた見事な方言のせりふの数々が、作品を支える基盤に直結する意義をもつものであることがわかってくる。それは言葉自体の面白さによって標準語の平板さをゆさぶり、テキストに異種のエネルギーを吹き込む。ただし、「私の祖父の時代」で朽助との主従関係は終わり、そしていま朽助の家が水底に沈められようとしていることが示すように、谷間の社会は変化の渦に巻き込まれている。朽助の話す方言自体も、そのいきいきとした印象にもかかわらず、「朽」ちていく定めにあるのかもしれない。いずれにせよ、ハワイ経由で谷底に住み着いた老人の前途には、さらなる試練が待ちかまえているのではないか。

手元の国語辞書によれば、「流謫」には「亡命」とともに、「親しい人・土地から離れて暮らすこと」という意味もある。井伏鱒二の作品はそのいずれの意味においても流謫のしるしの下に置かれている。流謫の途次にある人間たちの言葉が帯びる、ユーモラスでもあり悲痛でもある表情をとらえる敏感さは、つねに彼の文学の際立った特徴であり続けた。

そこで最後に、広島県福山市の山中に暮らす朽助と、ロシア文学の（これまであまり指摘されていないはずの）関係を指摘しておきたい。「朽助のいる谷間」の30年近く後に

書かれた「十二本の山毛櫨」におけるロシア文学礼賛が、その点をはっきりと照らし出してくれる。そこではチェーホフ、ツルゲーネフ、トルストイの名が挙げられていたが、朽助像の創造のうえで大きな役割を演じたのは、プーシキンの『大尉の娘』だったのではないか？

主人公をとにかく応援してやまない朽助的な人物像としては、漱石の『坊ちゃん』に登場する「清」がすぐに思い出される。しかし下女の役柄に甘んじる清に対し、朽助は尋常小学校時代、「私」の個人教師を務めたのである。そこに『大尉の娘』に登場する愉快な老僕サヴェーリイチとの共通点を指摘できる。サヴェーリイチはもともと馬丁だったが、素行のよさゆえに、主人公が五歳になると「じいや」つまり扶育係を仰せつかり、その監督のもとで主人公は「十二の年にはロシア語の読み書きを習得」した（プーシキン『大尉の娘』坂庭淳史訳、光文社古典新訳文庫、2019年、8頁）。このじいやは主人公が地方の連隊に勤務することになると一緒についてきて、主人公の青年に頑固なまでの一途さで尽くし、絶妙な脇役ぶりを発揮する。「十二本の山毛櫨」にプーシキンの名はなかった。しかし若年の井伏が「図書館で徳田秋声訳の『大尉の娘』を読んで感激」したという回想の言葉が有力な傍証となる。「感激して、こんなものがあるのかと驚いてね。こんないいものがあるとはね。あれが文学を僕に勧めたようなものです」。88歳での対談時の発言である（「文学七十年」聞き手・河盛好蔵、『井伏鱒二全対談』下巻、筑摩書房、2001年、227頁）。

ここで井伏が「徳田秋声訳」と断っているのは、単に著名な作家の訳だから有難がったという話ではあるまい。プーシキンのこの小説は日本で翻訳された最初のロシア語小説の一つとして知られている。明治16（1883）年に出た高須治助による『花心蝶思録 露国奇聞』が初訳だが、同作品の校注を担当した安井亮平によれば主人公と士官の娘という「若い二人の恋物語」に焦点がしぼられ、「副次的登場人物への関心が大変に低い」（『新日本古典文学大系明治編 翻訳小説集二』岩波書店、2013年、528頁）。サヴェーリイチなどは「まことに影が薄い」のである。一方、やはり安井によれば明治37（1904）年の足立北鷗、徳田秋声共訳『士官の娘』になると、サヴェーリイチは「若主人の『自分』を処刑から救う場面などで、原作以上に目覚ましい活躍をする。彼に寄せる記者の好感が訳文に感じられさえする」（535）。

実際に二つの翻訳に当たってみると、その評言の的確さがよくわかる。高須訳と足立・徳田訳のあいだで何よりも大きな変化を示しているのは人物のせりふである。前者の老僕は「郎君我ヲ愁殺スルナカレ」などというのに対し、後者では「若旦那、お前さん私のやうな老耄を一人、賊……いやさ、こんな處に置いてき堀はお怨みでございますよ」（『士官の娘 露国軍事小説』集成堂、1904年、113-114頁）という調子だ。いささか歌舞伎調ではあるが、しかしせりふをとおして老僕の忠勤ぶりが鮮やかに表現されていることに、井伏は目を開かれたのではなかったか。明治の二種類の翻訳は今日で見ると、なお翻案の性格を残している。高須訳では人物たちになぜか英語名が与えられ、サ

ヴェーリイチは「クリントン」と呼ばれていた。より忠実な訳とみなされる足立・徳田訳では、人物たちには日本語名が与えられ、サヴェーリイチは「佐平治」になっている。それらの翻訳には、ロシアから日本への移民の軌跡が刻まれているかのようだ。そして井伏は「佐平治」の面影を宿す「朽助」を造形し、彼に自らのふるさとの言葉を話させることで、ツルゲーネフの愛すべき老僕の日本人化を完遂するとともに、自らの文学の第一歩をしるしたのだ。

こうした井伏の例が示すのは、文学創造が流謫の経験によっていかに深く条件づけられているかということである。井伏は旅を好んだとはいえ、日本の外に出ることは、陸軍に徴用されてシンガポールに行ったこと以外、まったくなかった。だが彼の作品における「ロシア」をたどり直すとき、一見ドメスティックな存在と思える作家においても、越境や漂流、異言語間の横断や文化変容といった亡命文学の根本的要素が、創作と緊密に結びついたかたちで存在し得るという事実が浮かび上がってくるのではないだろうか。

"An Auspicious Day in Autumn": Ibuse Masuji and the Language of Exile

NOZAKI Kan

Although travelling little abroad, Ibuse Masuji (1898-1993) often shows foreign characters in his texts. They are mostly exiles who found refuge in Japan. The Japanese too are sometimes destined to expatriate themselves, like the shipwrecked fishers in the Edo period: Ibuse has always a keen interest in them.

This article focuses on Russian factors in Ibuse's work. On the one hand, Russian emigres are privileged characters. The writer develops through them the themes of loneliness, wandering and acculturation. On the other hand, he relates in several novels the drift of Japanese immigrants reaching Russia. *The Twelve beeches* (1952) deserve special attention: it tells a curious adventure of a young Japanese bound to be naturalized in Russia, on the eve of the Russo-Japanese war. The novel reflects Ibuse's strong penchant for Russian literature, which inspired him from the beginning.

The example of Ibuse allows us to understand that migratory dynamics can play a vital role, even in a seemingly domestic writer.